

色とフォントのイメージへの相互影響に関する基礎検討

学籍番号 90130143 西田研究室 南 幸輝

1 はじめに

近年、Web 利用者の増加に伴って一般ユーザの間でも自分の Web ページを持ちたいという願望が増加してきた。しかし、従来の Web ページ作成支援では、色使いやフォントの組合せなどについてはあまり焦点が当てられてこなかった。

この問題に対して渡辺らは、イメージスケールと呼ばれるイメージ語を関連付けて配置した二次元平面を用い、色とフォントをユーザのイメージにあわせて組み合わせることにより、ユーザが自分の望む印象で Web ページを作成できるように支援するシステムを提案している。しかし、渡辺の研究では色に対するイメージとフォントに対するイメージ、そしてそれらからできる Web ページのイメージの関係は考慮されていなかった。本論文では、イメージスケール上でのフォントのみのイメージ、色のみのイメージ、フォントと色を組み合わせたイメージをそれぞれ調査し、色とフォントを組み合わせることによってイメージにどのような影響があるのかを検討した。

2 実験方法

実験は SD 法と呼ばれるアンケート手法を用いて行った。SD 法で用いる対応語は、言語イメージスケールをその原点を通る 8 本の軸で分割し、それぞれの軸の両端に位置するイメージ語を用いた。実験では、ユーザにフォントのみを提示し、フォント単体のイメージについてのアンケートを取った。同様に、色単体のイメージ、そしてそれらを組み合わせたトータルのイメージについてそれぞれアンケートを取った。フォントは Windows 標準の日本語フォントの中から 8 種類を選択した。色はイメージスケールを均等に 16 分割し、分割した領域それぞれを代表すると考えられる色 1 種類ずつを選択した。組み合わせは、フォント 8 種類と色 5 種類の計 40 種類とした。実験には、30 人の被験者（10 代～50 代の男女 15 名ずつ）が参加した。

3 実験結果解析

まず、各設問について 30 人の重心を取った。重心がイメージスケールの原点に近いものは、イメージに対する影響が小さいものであると考えられる。まず、重心とイメージスケールの原点との距離を算出し、イメージに対する影響の大きいものと、イメージに対する影響の小さいものに分類した。

結果、イメージに対する影響の強い組み合わせはすべて影響の強い色の組み合わせであった。

次に、フォント、色、そしてフォントと色を組み合わせたイメージそれぞれの重心の位置関係を調べた。組み合わせの重心が、フォント・色の重心が作る 1 対 2 の長方形に収まっているかどうか見てみると、7 割以上の組み合わせが収まっていた。また、フォント・色の重心の間に収まっていない組み合わせの重心は 5 % に過ぎなかった。

最後に組み合わせの重心の位置は、フォントの重心と色の重心のどちらに近いかを検討した。つまり、組み合わせのイメージは、フォントと色のどちらに引かれているかを検討した。その結果を図 1 に示す。図 1 より、全体としてトータルのイメージは色に引かれる傾向があることが分かる。分散分析を行った結果、危険率 10 % で有意差は出なかったが、影響の強い色の組み合わせでは危険率 10 % で有意差が出た。

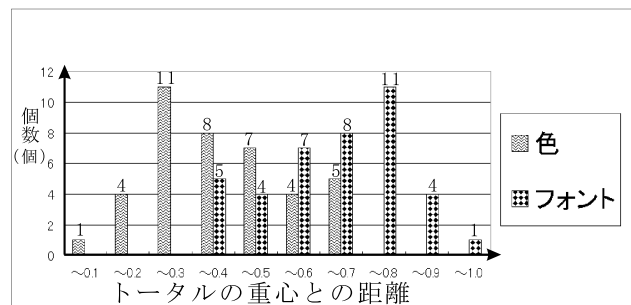


図 1: 重心間の距離のヒストグラム

4 まとめ

色とフォントを組み合わせたイメージは、色とフォントのイメージの中間的なものになると分かった。ただし、影響の大きさとしては、もともとイメージへの影響の強い色が組み合わせのイメージについても支配的であることが分かった。つまり、Web ページのデザイン支援では色に重点をおいて支援をし、フォントに関してはある程度の自由度を持たせて、イメージが崩れないようユーザに選択させるのが望ましいと考えられる。

5 研究実績

インターメディアフォーラム 2001 出展